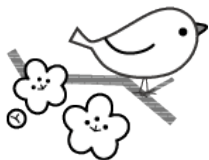


「成長すること」と「物語」

校長 森 和 久



3月の生活指導の目当ては「成長の仕方を考えよう」です。まさに1年間の締めくくりの目当てです。人は一生学び続け、成長し続ける存在です。人に言われたことを、言われたように伸ばすだけではなく、自分で何を伸ばしたいか、どのようにしたら伸ばせるのか、うまくいかない場合にはどうしたらよいのかを考え、自分で成長するサイクルを確立していくことが重要です。このことは学校で学ぶことのうち最も大事なことのうちのひとつだと考えますし、社会に出てからも大事なことだと考えます。

その際、その成長のサイクルがうまくいくかどうかは、意外に思えるかもしれませんが、自分の成長に関してどんな「物語」を描くかが重要であると考えています。例えば、成長に至るまでの困難の克服の過程をどう把握して、自分の現在地をどう捉えるか。これを多くの人は「ストーリー(物語)」として構成します。逆の言い方をすると、一般的に人は、過去の出来事や自分というものを、ストーリーの形でしか認識できないのです。成長に関するストーリーとは単純化すると例えば次のようなものです。「いくつもの困難を克服してここまで成長できた、あとはスムーズにいくだろう」「順調にここまで成長し続けることができた、これからは大変だけれども頑張ろう」「うまくいかないことの連続で、全く成長の跡がみられない。これからはきつとうまくいかないだろう」随分異なるストーリーですが、これらは同じ経験から構成されたストーリーなのかもしれません。同じできごとでも「順調」だったり「困難」だったりするのは、その捉え方次第で、しかもその捉え方は、日々揺れ動くものです。

どんなストーリーを描くかは自分次第で、「成長」という観点からすると、「これまでもだめだったから、これからも

だめ」というストーリーよりは、前向きに「少しずつ困難を克服してきた、これからも克服できる」というストーリーを描いた方が、成果が出やすいと思います。成功体験の集積が粘り強さを産むということとつながっていると思います。

とはいうものの、できごとの捉え方は、日々揺れ動きまわります。自信に満ちたときもあれば、全く自信を失うときもあります。そうした揺れ動くストーリーをはっきりさせる方法に、「話す(書く)」ということがあります。人は、言葉にすることで、物事をはっきりさせます。話すことで揺れ動くストーリーは、ひとつの「物語」となります。「成長する自分」を「物語」とすることで、揺らぎがちな自分が「物語」に支えられ頑張ることがができます。人は自分で構成した物語に支えられて、成長を続けることができるのです。

したがって、自分のこれまでとこれからの物語を、なるべく前向きな形で人に語る、文章に書くということはとても意味があることです。学校において行う発表や作文、日記の中には、結果的に、自分の成長物語をつくるという意義があるものが多くあり、人に伝えることで、その物語は、より強いものになっていきます。ただし、「物語」には、成長を支えるというメリットだけではなく、自分を縛ってしまうというデメリットもあります。過去に構成した物語が現状と合わなくなってしまった場合は、別の物語をつくる必要があるのに、これまでの物語に縛られ過ぎてしまう。例えば「頑張る物語」から逃げた方がよい状況でもそれができずにいるというようなことです。

「物語を構成する力」とともに「物語を構成し直す力」が重要だと考えますが、これはいろいろな物語を認識することと自分を見つめることが必要だと考えています。そして、それは学校教育の中で行っていることとつながっていると考えます。

